

21世紀のスキーと指導者像を求めて

著者	福岡 孝純
出版者	法政大学体育・スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学体育・スポーツ研究センター紀要
巻	21
ページ	39-41
発行年	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/4130

21世紀のスキーと指導者像を求めて

Grope for the ideal image of Ski & Ski-instructor in the 21th

福岡 孝純 (法政大学)
Takazumi FUKUOKA

1 はじめに

わが国は、いま、激変のなかにある。空前の不景気、多発するテロに代表されるセキュリティの悪化、急激なIT化（インターネット、モバイル etc.）、国内産業の空洞化や構造改革、リストラ、少子化、高齢化、過密と過疎、青少年の非行、学級崩壊や大学の定員割れ、医療費の高騰や各種の社会的費用の増大、環境の汚染や破壊の進行など、社会問題は山積みである。また、エネルギー革命、グローバルスタンダードやローカリズムの問題にも早急に対応しなければならない。これまで生産中心であった我が国の政策は、生活重視にパラダイムシフトし、誰もが生涯を通じ安全・安心に、健康で生き生きと自分に合ったライフスタイルで多様な形式で生活を送れるよう（自己実現）社会構造を変化させてゆくことが必要となってきた。それと共に、グローバル・ローカライゼーション、すなわち、世界のなかでの日本の位置づけをしっかりと捉えること（ジャパン・ウィズ・ザ・ワールド）が求められている。

すでに、現行の全国総合開発計画では「21世紀の国土のグランドデザイン」として、地域の自立と美しい国土の創造を目指しているが、どのようなインフラストラクチャや地域づくりをするのか、また、諸外国とどのような関わりをもってゆくののかについては不明確である。

21世紀の国民生活を保障するには、単にマクロの視点からの地域振興構想の策定にとどまらず、地域共同体（コミュニティ）に焦点をあてた農工構造一体化の田園都市構築を目指し、多自然型居住地域の創造などが地場産業を包摂するかたちでの生活構想が推進されなければならない。例えば、次世代型の福祉政策はこれらの与件を踏まえつつ、従来型の画一的なものではなく、行政、家庭、企業のトライアドに、学校（教育機関）とNPOやボランティアなどを加えた複合的な枠組みのなかで考える必要がある。「共に支え、共に生きる人間性豊かな福祉社会」を目指して、地域（コミュニティ）は、生活者中心の発想のもとにバリアフリー、ノーマライゼーションを可能とするユニバーサルデザインにより構築されることが必要になってくる。そのようななかで地域、環境、健康、福祉、観光、芸術、文化、スポーツなどが新しい社会のキーワードとしてクローズアップされてくる。私たちのスキー活動は、これらの概念いずれとも深い関わりをもっている。

では、21世紀におけるスキーとは、具体的にはどのような意義と役割を有するべきなのだろうか。

2 新しいトレンド

1990年代の初めの我が国のスキー人口は約1500万人、スキー場数約670ヶ所で、94年には世界初の幅80m、長さ500mのスロープを持つスキードーム（屋内人工スキー場、『ザウス』）が完成し、また多くのスノーボード用のスタジオつくられてきた。殆どのスキー場が高速デタッチャブルリフト、スノーマシン、ナイター設備、ピステンマシーン、駐車場、レストハウス、チップによるフリー入場システムを備え、スキーの関連商品の売上でも世界の約4割強を占めるなど、90年代は世界最大のスキー王国との声もきかれるほどであった。それが今ではスキー客は減少に次ぐ減少を重ね、おそらく現時点では、スキー人口700万人（1999/2000冬）が妥当な数字と言われている。スキー人口の激減や今年9月末のスキードーム『ザウス』閉業などスキー場の経営不振について多くの識者は“オーバー・クオリティ（過剰品質）”と“オーバー・サプライング（過剰供給）”を指摘しているが、私は問題はそのような表面的なことではなく、日本人の生き方（Way of Life）の根源に関わるものであると考えている。インタースキーの前2回の大会がバブリーなスキーの頂点とすると、スキーはいま、明らかに新しい方向に歩み出していると言えよう。これからのトレンドはいかに生活の快適性を保持しつつ、また、いかにして自然に悪影響を与えないウィンターリゾート活動を可能とするシステムを構築するかということだ。人間主体の一方的なヒューマニズムだけでなく、自然にも良く人間にも良い点をなんとか探ろうというのが、活動の場を提供する者の倫理（モラル）となる。

3 パラダイムの変換

90年代前半には、まだ環境問題は真剣に取り上げられていなかった。ウィンターリゾート活動を活性化させて大都市住民にスポーツや保養・レクリエーションの機会を提供する方がはるかに重要だったのだ。

1963年、スキー界の法皇と言われるクルッケンハウザー氏が来日した時、大都市東京を見て「過密状態の都市のなかだけにいてはいけない！ 体を動かせ、運動不足は病気の元

だ」と述べ、当時の厳しい日本の自然保護に対して「木々は成長する、しかし人間が枯死してゆく」と、スキー場の開発促進をアドバイスしている。確かに私たち人間は、日常生活の中で運動やスポーツを行うことを不可欠としている。しかし、今日の状況はというと二酸化炭素による温暖化、亜硫酸ガスによる酸性雨の被害は世界の全域に及び、その他の公害物質も枚挙にいとまがない。環境保護とレクリエーションの必要性という矛盾した要求に直面する時、私たちにとって取るべき唯一の結論は、環境倫理的見方に立って人間生活を考えるということである。それは、自然と人間の共生（シンバイオシス）を要求し、現状の私たちの生活のあり方にいくつかの疑問を呈している。技術や理論が進めば進むほど文化は文明に近づき、それは、知らず知らずのうちに人間を疎外へと追い込んでゆく。そのような状況に陥らないためには、技術主義（ハイテク、ハイタッチ）ではなく“自然（外面性、内面性）にもどる”ということとは何か、を本質的に考えなければならない。

技術化と情報化はスキーの世界においても近年、ますます進展している。現代の技術文明がその特性によって生産性を向上させ、その結果としてウィンターリゾート活動ができるような生活のゆとりが創出されたことは、疑いもない事実である。しかし、残念ながらこの活動の技術化はスキーそのものを機械化するという危機をもたらした。技術の進歩には、個々の人間を画一化・平準化する（人間性の疎外化）プロセスを内包しているからである。

ウィンターリゾート活動の動機である冒険、遊びとスポーツ、やすらぎや癒し、甦りなどには、大きな共通点がある。それは人間があらゆる義務から解放され自発的に何かを達成するもの（こと）、つまりそれは、自己蘇生、自己解放、自己実現、自己創造をなしうる行為であるということだ。ここに、私たちは再び人間と自然が一体となる共生の原理をみることができる。

ウィンターリゾート活動では、素朴な自然への感動がおろそかにされてはならない。なぜならば、究極的な人生の喜びは、身体的なものにとどまらず精神的なものだからである。そのような意義に基づいて見出されるウィンターリゾート活動の根源的な動機は、ネイチャー・ファッショニングである。今日の社会において、真に人生の歓喜を味わうことは簡単ではない。しかし、少なくともウィンターリゾート活動にはこの歓喜を味わえる可能性があるべきであり、私たちはそれを通して、精神世界の深みの域で環境との共生を感じ取ることができる。

ウィンターリゾート活動を提供する側の人間には、この歓喜を仲介するという大きな使命がある。全ての人にウィンターリゾートドリームが具現化されるよう努めねばならない。環境問題、経済問題や施策立案が簡単でないことは事実です。しかし私たちは自発性を失うことなく、机上の理論にまどわされることなく、生命が弾き出るウィンターリゾートの素晴らしさを伝えてゆかねばならない。

我が国のウィンターリゾートがどちらかというの特化し、差別化し、機能化して、その特異性による“生き残り”を模索しているのに対し、ヨーロッパの著名なスキー場、特にベスト・オブ・アルプスに属するスキー場、例えばサンモリッツ、レッチ、サンアントン、ダボス、ツェルマットなどは、ウィンターリゾートの楽園化を目指して総合的にバランスの取れた環境づくりを進めており、何よりも、ウィンターリゾートの充足、自立を図っています。そして、同様のポリシーでグリーンシーズンにも対応している。原理は簡単で「ナイス・ピープル&ナイス・コミュニケーション、ナイス・ネイチャー&ナイス・コミュニケーション」をどのように具現化するかというきわめて単純な課題設定である。

スポーツはその根源に“むすびつけ、命を与える”という性格を有している。スキーも例外ではない。何の変哲もない生活空間が、ファッショニングにより一瞬にして夢や希望に満ちた空間に生まれ変わる。その夢づくりの手ほどき、先達あるいは模範こそが、スキー指導者に他ならない。指導者でもプロは、あらかじめ定めた教義教程の内容を教えるというスタイルに基づくレッスンを行うことが多く、どちらかという保守的である。一方、アマチュアスキー指導者にとって大切なのは予め決められたプログラムを伝達することが第一義なのではなく、自らも生徒と共にスキーの夢を追及する仲間であるという自覚をもってレッスンを行うことである。したがって、アマチュア指導者の質こそが純粋に商品化される以前のスキーの理想である。大自然に直面し、その自然の恵み、厳しさを理解しつつ、冬をパラダイスとして愉しむ、そのやりかたは全てアマチュア指導者の手に委ねられているといえるのである。

1950年代から90年代までのスキーヤーの夢は、大自然に対決する技術の習得であった。1950年代にオーストリアのクルッケンハウザー氏らにより競技の技術を参考につくられたバインシュピール技術は、その合理性からスリル、スピードを追及する技術優先のスキーに合致するものだった。バインシュピールは世界の主流を占め、オーストリアのホピヒラー氏に引き継がれて世界のトレンドになった。私はちょうどその頃サンクリストフでスキー技術の物理的解析（バイオメカニクス）に取り組んでおり、将来のスキー技術はマテリアル（用具）が決定し、そのため“滑り”は限りなく画一的になり、ロボットやゲーム・マシンのようになると予測するに到り、その時、このような技術との決別を決意した。

スポーツの哲人ヨゼフ・レックラー氏は「私たちは、スキーをする前にまず人間であれ、そして大自然と共に生きる畏敬の念をもて！」と述べられた。自然とは単にアウトドアを指すのではなく、自然は私たちの心の中にもある。人間を知り、自然を知り、一体となるフィーリングを追及することで、人間は大宇宙の神秘に触れ、活然の気を感じられるようになる。この時、スキーはかのフリチョフ・ナンセンがいったように、再びスポーツの王者として返り咲くことができるだろう。

いま、必要なのは安易な計算・計量主義に基づく薄っぺらなニセモノの理性ではなく、感性を含む絶対者の叡知ともいえる宇宙的理性である。私たちが獲得せねばならないのは「氷が溶けたら水になる」という論理だけでなく、「氷が溶けたら春になる」という叡知である。

スキーの指導者、それは技術の指導者ではなく、人間の指

導者、生命の歓喜を探る指導者でもある。

スキーの指導者には、素朴な自然への感動をおろそかにせず、スキーを通して身体的にも精神的にも生きていることの喜びを仲介するという大きな使命がある。ワン・フォア・オール、オール・フォア・ワンこそ、この道へ到るキーワードだ。

表1 日本とヨーロッパのスキーライフの比較

	日本	ヨーロッパ
週末スキー	ウィークエンドスキーが主体で、これに年末年始や連休が加わる。また、冬休みや春休みのニーズも大きい。	ウィークエンドスキーは、どちらかというとプレシーズンやアフターシーズンの氷河スキーなど、スポーツ的スキーヤーに多い。
リゾートスキー	バブル期にようやく始めようとしたが、供給者側の単価が高く、長期でも4～5日が限度であった。年末年始や連休に集中し、バカンスとしては定着していない。(不景気により、ますます後退)。	かつては2～4週間スキーをする人がザラにいたが、最近は他の海型や海外バカンスとシェアするので、1週間の人も増え、2週間以内がほとんどとなった。
スキー活動の動機	自由時間的スキーヤーが急増。今までの技術中心から、活動参加型のマススキーヤーが増えた。スキーヤーのアノミー状態。カービングによりマニア層を復活させる努力。	やや短期になったとはいえ、あくまでもスキーは自然環境の中で、ゆっくりヘルシーにエンジョイするところにある。従って、ゆとりを持ちつつ、ロングコースや各種の雪質や斜面を楽しむことを目的としている。
構成年齢	かつての30歳前後の独身の男女により構成されている層は減少。最近ではファミリースキーが急成長。	かつては全世代にもれなく分布していたが、最近では高齢化が目立つようになってきた。
スキー場の形態	○人工スキー場（ザウス） ○人工降雪スキー場（軽井沢、富士見、佐久など） ○機能型スキー場 ・スタジオ型（車山、野辺山） ・交通便利型（ガーラ） ・自家用車専用型（川場） ○プラザ型スキー場（石打、上越国際） ○パーク型スキー場（本格型） ・志賀、八方、野沢、蔵王、グランデコ、ニセコ、キロロ、ルスツなど	ほとんどが高度差の大きい本格的な山岳スキーだが、北米には人工降雪によるスキー場も数多く存在する。最近、ドイツのルール地方にオーストリアと共同で人工スキー場が出来た他、ドイツ、オランダ、イギリスなどに十数ヶ所の人工スキー場が整備された。
スキー人口の構成	○自由時間（レジャースキーヤー） ○スキー愛好家（ファッション的） ○スポーツ的スキーヤー（クラブ・サークルに所属している人々） ○トップスキーヤー。わが国は、まだスキー愛好家と言われるフィーバー派が多数存在するので、カービングを梃子にまだ復活の可能性。	○自由時間（バカンススキーヤー） ○スポーツ的スキーヤー（クラブ・サークルに所属している人々やスポーツ的に滑りたい人） ○トップスキーヤー ○アドベンチャースキーヤー

表2 ウィンターリゾート活動のモチベーション

今までのウィンターリゾート	これからのウィンターリゾート
技術・方法論的	生命の充実、健康
機能的	情動的
エネルギー	調和
男性的	男性性・女性性の調和
機械的能力の向上	身体的・精神的解放（心身の解放）
合理的・単純系	非合理的・複雑系
人工的環境	自然と交流する環境
パフォーマンス	交流性